

令和 2 年 6 月 11 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02795

研究課題名(和文)文章構造における誤用分析に基づく文章表現辞典の開発

研究課題名(英文)Development of a Dictionary of Sentence Expression Based on Analysis of Misuse in Sentence Structure

研究代表者

木戸 光子(Kido, Mitsuko)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：20282288

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では日本語中上級学習者に対して作文学習に必要な表現辞典を作成する目的で、学習者の作文の誤用の中で中上級レベルに共通する誤用を特定した。それらの誤用を踏まえ、文法・文体に関する学習項目に関して、作文に参照できる学習教材を作成した。一方、文章レベルの誤用について、書き手から見た作文学習の困難点を探るため、作文調査を中上級学習者と日本語母語話者に行った。文章表現辞典のもとになる作文学習のための学習項目の選定基準、および、学習者の立場から見た学習項目の選定と体系化の必要性が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果の学術的意義は、日本語教育分野において文章レベルの誤用を取り上げ、文法学習とは異なる作文学習の必要性という観点から、文法・文体を取り上げたことにある。また、社会的意義として、作文学習に参照できる文法・文体に関する学習項目をウェブサイト上に教材として公開したこと、および、作文調査で収集した作文データを公開可能なデータとして準備できたことが挙げられる。オープンアクセスできる教材やデータは今後も広く日本語教育において利用可能となる。

研究成果の概要(英文)：The study aims to create a dictionary of expressions that are necessary for learning Japanese composition for intermediate and advanced learners of Japanese. Learners tend to misuse several expressions. Based on these misuses, we created learning materials that can be referred to for clarifications regarding grammar and writing styles of the Japanese language. In addition, we investigated the difficulties experienced by learners in learning composition that lead to these misuses of expressions. To investigate, this study conducted a survey regarding composition with the intermediate learners, advanced learners, and native Japanese speakers. The criteria for the selection of study items for composition, which is the basis of the dictionary, and the need for selection and systematization of study items from the standpoint of learners were clarified.

研究分野：日本語教育、日本語学

キーワード：作文 誤用 中上級日本語学習者 文章表現 文法 文体 文型 日本語教育

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

日本語教育において、上級学習者に対するアカデミックライティングや専門日本語の教科書、および文章表現に関する知見を踏まえた専門書が出版されるようになった。また、コーパス言語学の日本語教育への応用も進み、言語習得によるアプローチなど誤用研究も広がりを見せている。しかし、上級学習者の文章作成時に共通する文章レベルの誤用については、作文データに基づく知見が不足している。習得研究でも特定の表現に関しては研究されているが、文章構造に関与する接続詞全般やモダリティ表現全般といった体系的かつ包括的な誤用研究はまだ不十分である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、言語の記述的研究に基づき、文章構造における構成要素となる言語形式の使用傾向から作文分析を行い、上級学習者の誤用の要因を明らかにし、その成果を応用して文章表現辞典を開発することである。そのため、以下の課題を明らかにして、上級学習者の作文学習を支援するための文章表現辞典を作成し、ウェブサイト上に公開する。

(1) 従来の誤用の概念を文章構造に関連する要因から再整理し、「誤用」の他に、「非用」、さらに「非用」の一部として「避用」・「代用」を定義し、上級学習者の文章レベルの誤用の典型例を特定する

(2) 上級学習者の作文について、接続表現・叙述表現・提題表現・反復表現・指示表現という文章構造の構成要素に関して誤用の使用傾向を探り、作文学習において重篤度の高い誤用を明らかにする

(3) 文章レベルの誤用の典型例と誤用の重篤度を基に、文章表現辞典を開発する

なお、本研究における文章構造および文章構造の手がかりとなる表現については、木戸(2015)で以下の表1にまとめたものを指す。表1は、市川(1978)、永野(1986)、寺村・佐久間・杉戸・半沢編(1990)の文章構造および文章構造の手がかりとなる言語形式、概念、定義を踏まえて一部修正したものである。

表1 文章構造の関係性とそれを担う要素

潜在的な関係性	定義	顕在的な要素	定義
連鎖	文脈展開機能に関係する同種の言語形式の文章全体における出現の連続・不連続の様相	提題表現	文章や談話の話題を示すもの
		叙述表現	提題表現と呼応して文を構成するもの
		反復表現	繰り返して出てくる同一語句
		省略表現	文中の要素のいずれかが欠落しているもの
接続	文（または複数の文からなる段落）相互の接続関係	接続表現	接続詞や接続助詞および、それに相当する機能を持つ語句（副詞・名詞・連語等）や文
		指示表現	文章・段落や場面の中の他の部分を指し示すもの
		時間表現	文章や談話の時間を示すもの
		メタ言語表現	文章の展開を示すもの
配列	前後関係から見た特定の言語形式出現の相対的な位置	文相互の順序	文相互の相対的な前後関係
		文章全体での文の出現位置	文章の冒頭部・中間部・終了部への出現

出典：木戸(2015)より転載

3. 研究の方法

研究当初の目的では上級学習者を対象にしていたが、作文では上級から中級にかけて共通する誤用が多いことから中上級学習者に対象を広げた。さらに、教育実践により近い形にするために研究方法と計画を一部修正し、以下のように行った。

(1) 誤用の再定義

文章レベルの誤用という点から文法学習とは異なる作文学習への必要性を踏まえ、作文学習で問題となる文法および文体上の誤用に焦点を当てることにした。木戸(2014)の2011~2013年度科研で作成した中上級日本語学習者作文データベースある中上級日本語学習者210名の課題作文を基に誤用の検討を行い、その成果を基に誤用の再定義を試みた。

(2) 日本語学習者の作文の誤用

作文データベースの作文分析、および研究協力者の日本語教師5名の作文授業における知見

を基に、接続表現・叙述表現・提題表現・反復表現・指示表現という文章構造の構成要素に対応する文法および文体上の言語形式に関して誤用の使用傾向を探り、作文学習において重篤度の高い誤用を特定した。作文の誤用の検討に際し、加藤他(2016)で用いられた作文授業初日のレベルチェック作文とその分析結果を参照した。

また、日本語学習者の作文学習と誤用に関する意識を明らかにするため、中上級日本語学習者と日本語母語話者に対して作文調査を行い、作文学習に関するアンケート、および、対象者の一部に半構造化インタビューも行った。調査は、中上級日本語学習者65名と日本語母語話者44名の計109名(うち学習者1名は2回調査に参加したため実数は計108名)に研究承諾を得た上で実施した。内訳は、2018年7月に中上級学習者20名、2019年7月に中上級学習者17名、日本語母語話者3名、2019年12月～2020年2月に中上級学習者28名(うち1名は2回調査参加)、日本語母語話者41名である。同じ教室で作文調査とアンケートを全員に行った。作文は60分以内で手書き、辞書なしで課題作文600字程度を書くこととした。インタビュー協力の承諾を得た者には、別の日に研究代表者の研究室でインタビュー1人約30分を実施した。アンケートとインタビューでは、作文学習に関する意見を聞き、課題作文における誤用を手がかりに学習者および母語話者が作文学習に対する困難点や作文を書く行為の捉え方を探った。

(3) 文章レベルの誤用の重篤度による文章表現辞典

日本語学習者の作文の誤用を踏まえ、作文データベースにある誤用を検討し、参照しやすい形で公開することを目指してパワーポイント教材の形式で文章表現辞典を作成することにした。中上級日本語作文授業の担当経験のある現役日本語教師5名の協力を得て、ディスカッションを行い、文法と文体に関して作文の誤用から見て重篤度の高い学習項目を選定し、基本的な文法や文体の意味用法の説明と例、および作文学習上の諸注意を加えるようにした。

4. 研究成果

(1) 誤用の再定義

中上級学習者の作文には、(1)正しい使用を予測できる場合、(2)書き手の意図を文脈から判断する必要がある場合、という2種類の誤用が見られた。(1)は単語、句、節、文、または接続された文の誤用であり、これらの誤用は関連する言語単位を確認することによって修正可能と考えられる。一方、(2)は段落や文章に関わる誤用であり、文章レベルでの処理が求められる。一見すると正用のような誤用は、(2)文章レベルの誤用と認められる。

日本語教育の作文における誤用の重篤度について、趙(1991)は、作文の誤用について韓国人の日本語教師への助言として誤りの重みを判定する際の評価基準について、「文法的な正確さ」「母語の影響」より「意味が正しく通じるか」により重点を置くように提言している(趙1991:29)。宇佐美他(2009)の研究は意味予測ができる誤用とできない誤用とで誤用の重みが異なることを示唆している。白川(2007)は、誤用によって学習上の勘どころを見つけて優先順位をつけた学習を提言している(白川2007:174-176)。以上の先行研究では、作文に見られる誤用と正用が明確な認定基準に従って何らかの分類ができるものではなく、誤用か正用かの認定には揺れがあることを示唆している。

本研究でも、文章の誤用と正用の間にいくつかの段階があることを示された。したがって、学習者の作文の誤用について、①語、節、文レベル内で修正する誤用、②文章レベルまで言語単位の大きさを広げて修正する誤用、という2種類に分けることを提言する。

(2) 日本語学習者の作文の誤用

(1)の誤用の再定義を整理すると以下のようにまとめられる。

①語、節、文レベル内で修正する誤用

- 文章構造に影響なく正用に修正できるもの
- 当該の表現のみー語、句、節、文、連文レベルの誤用
- 単位に区切ってその単位内で修正

②文章レベルまで言語単位の大きさを広げて修正する誤用

- 文章構造の関係性に関わって正用に修正できるもの
- 段落、文章レベルの誤用
- 書き手の意図を考えて修正

学習者の作文で問題となる誤用は、添削や書き換えでは①が中心となるが、誤用が生じる理由を考慮すると②の文章レベルまで言語単位を広げた考察が必要となる。中上級学習者の作文の分析から、文章レベルの誤用には、特に、叙述表現と接続表現にかかわる誤用が見られた。例えば、叙述表現「考える」と「思う」と「言える」を混同する誤用が頻出している。これは自分と他者の行為、および、事実と意見の違いが認識できていないことから起こると推察される。また、叙述表現の一部「のだ」文の多用や避用という誤用も頻出している。白川(監修)・庵・高梨・中西・山田(2001)の言う「のだ」文の関係性を示す意味用法が充分学習されていないことから

起こると推察される。以上のような作文の誤用は、文章レベルの誤用の要因を考えることによって問題点が明らかになった。

また、作文調査から、書き手である学習者と母語話者双方とも表現の選択や多様性の不足に作文学習の困難さを感じていることがわかった。アンケートからは、学習者は作文を書く際に語彙の選択や文法の正確さに難しさを感じていることがわかった。また、作文学習の経験では、学習者は全員母語と日本語以外の言語を学習した経験があり、日本語学習は第二言語というより第三言語、第四言語という多言語学習の一部という位置づけであった。インタビューから、学習者の一部は母語での作文学習の経験だけではなく、日本語以外の外国語学習の経験や知識を活用して日本語の作文学習や自身の書く作文作成を行っている場合があることがわかった。例えば、中国語母語の学習者の中に自分の書いた課題作文は中国語の「議論文」と同じ種類の文章だと認識している人が複数いた。

以上の調査結果から、日本語学習に母語および外国語学習が少なからぬ影響を与えていることがわかった。作文における文章レベルの誤用の解明は、書き手の日本語の作文学習の他に、日本語学習に影響を与えたと見られる母語や外国語の学習内容や学習方法も含めて検討する必要がある。今後の課題として、日本語母語話者の作文にはあまり見られない学習者特有の表現や構成の使用実態やその要因について、誤用分析とは異なるアプローチで文化的な背景や学習経験も含めた解明が求められる。

(3) 文章レベルの誤用の重篤度による文章表現辞典

学習者の作文の誤用分析の結果を作文学習に活かすために、文章レベルの誤用の重篤度を踏まえた学習項目を選定する必要がある。そこで、中上級レベルに共通する誤用が多い表現のうち、文体、引用、接続詞・接続助詞、疑問文、文末表現、「る・た・ている」(テンス・アスペクト)の6項目を取り上げた。このうち、文体、疑問文、文末表現、「る・た・ている」は主に叙述表現に関係する言語形式であり、接続詞・接続助詞は主に接続表現に関係する言語形式、引用は接続表現と叙述表現の双方に関係する言語形式である。

作成した教材は、作文を学ぶ上で中上級学習者が参照でき、かつ体系的に作文のための文法・文体を参照できる、という目的に沿った教材となった。学習項目として取り上げた文法は、文法や作文の教科書でもしばしば取り上げられる項目である一方、作文のために必要な表現として作文学習の中で必ずしも体系化されていない項目であった。あくまでも作文学習から見て同一の範疇として取り上げるべき文法と文体上の特徴、から学習項目を選定した。複数の言語形式が文章レベルの誤用に重なっているため、体系的な文法学習や特定の文章の種類に頻出する文型という取り上げ方をしなかった。作文に必要な文型のリストに留まらず、従来の作文教科書や文法教科書とは異なる作文学習に必要な文章表現の基礎となる文法・文体を提示する教材が作成できた。

以上、研究成果のまとめとして、パワーポイント教材は学習者と教師双方が共有できる学習資源とするため、現時点では「作文ガイドブック」(仮称)としてパスワード付きでウェブサイト(<https://nihongosakubun.jimdofree.com/>)に公開している。また、作文調査で収集した作文109編は電子化が終わり、作文データ公開への調査協力者全員の承諾を得ており、データ公開に向けて準備している。

<引用文献>

- ① 市川孝 (1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版
- ② 宇佐美洋・森篤嗣・広瀬和佳子・吉田さち (2009)「書き手の語彙選択が読み手の理解に与える影響—文脈の中での意味推測を妨げる要因とは—」『日本語教育』140号: 48-58
- ③ 加藤あさぎ・小浦方理恵・石上綾子・木戸光子・田中孝始・長戸三成子 (2016)「中上級日本語学習者のレベルチェック作文における典型的問題点」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター 日本語教育論集』31号: 27-145
- ④ 木戸光子 (2014)『文章展開機能を重視した日本語上級学習者の作文教育』平成23(2011)年度～平成25(2013)年度科学研究費補助金基盤研究(C) 課題番号23520611 研究成果報告書筑波大学
- ⑤ 木戸光子 (2015)「作文教育における文章論と日本語教育の接点—日本語学習者が書いた新聞記事要約文の文章構造分析—」(第11章)阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三編『文法・談話研究と日本語教育の接点』くろしお出版: 201-222
- ⑥ 白川博之監修、庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘 (2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- ⑦ 白川博之 (2007)「学習者の誤用・非用をどう考えるか」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部 59号 広島大学大学院教育学研究科: 173-179
- ⑧ 趙南星 (1991)「韓国人の日本語学習者の誤りの評価—日本語話者と韓国語話者による誤りの重み付け—」『日本語と日本文学』15号、筑波大学国語国文学会: 19-40
- ⑨ 寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編 (1990)『ケーススタディ日本語の文章・談話』おうふう
- ⑩ 永野賢 (1986)『文章論総説』朝倉書店

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 木戸光子	4. 巻 35
2. 論文標題 上級日本語作文の誤用の文章構造分析の意義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.15068/00159843	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 木戸光子， 加藤あさぎ， 小池康， 平形(高橋)裕紀子， 石川早苗， 君村千尋	4. 巻 26-2
2. 論文標題 中上級日本語学習者のための作文ガイドブックの開発と授業での使用 作文に頻出する学習者の誤用を踏まえて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語教育方法研究会誌	6. 最初と最後の頁 142-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木戸光子・加藤あさぎ・小池康・平形裕紀子・石川早苗・君村千尋	4. 巻 34
2. 論文標題 中上級日本語学習者のための作文ガイドブックの開発	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集	6. 最初と最後の頁 41-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 木戸光子
2. 発表標題 上級日本語学習者の作文の添削から見た文章レベルの誤用分析 - 学習者視点の誤用説明の必要性
3. 学会等名 日本語教育国際研究大会(ICJLE2018)（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木戸光子
2. 発表標題 人文系大学院における言語技術の授業実践 言語科目と専門科目における文章作成および口頭発表の役割
3. 学会等名 日本語教育方法研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木戸光子
2. 発表標題 日本語学習者の作文における機能語に相当する表現の誤用 「原因」と「理由」の使用をめぐって
3. 学会等名 第12回国際日本語教育及び日本研究シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木戸光子
2. 発表標題 中上級日本語学習者との作文をめぐる対話 - 学習者が作文を書くとき考えていること
3. 学会等名 第8回談話分析コロキウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木戸光子
2. 発表標題 文章構造分析から見た日本語教育の作文教育 - 文章レベルの誤用をめぐって
3. 学会等名 作文研究2018（科研共同シンポジウム）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木戸光子・加藤あさぎ・小池康・平形裕紀子・石川早苗・君村千尋
2. 発表標題 文脈に関わる文法・文体に着目した『作文ガイドブック』の開発
3. 学会等名 筑波大学 CEGLOC日本語・日本事情遠隔教育拠点シンポジウム2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木戸光子
2. 発表標題 人文系大学・大学院留学生に求められる日本語リテラシー 複数の文章作成と発表を組み合わせた授業実践を通して
3. 学会等名 第25回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉浦千里・木戸光子
2. 発表標題 書くことを楽しむ中級作文教材開発
3. 学会等名 日本語教育方法研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木戸光子
2. 発表標題 「オンライン」の文章構造分析に基づく作文添削の意義 上級作文授業における作文添削を通して
3. 学会等名 日本語教育方法研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木戸光子
2. 発表標題 日本語上級学習者の作文に見られる誤用 - レベルチェック作文とレポートの比較を通して -
3. 学会等名 第7回談話分析コロキウム
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 木戸光子
2. 発表標題 文章構造を変えないで言い換えることはどこまで可能か - 上級日本語学習者が書いた要約文における言い換え表現の使用状況を通して
3. 学会等名 AATJ 2017 Annual Spring Conference (American Association of Teachers of Japanese) (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

https://nihongosakubun.jimdo.com/ 日本語作文のページへようこそ (科研成果公開用ウェブサイト)
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	加藤 あさぎ (Kato Asagi)	筑波大学・グローバルコミュニケーション教育センター・非常勤講師 (12102)	教材作成における専門的知識の提供

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	小池 康 (Koike Yasushi)	大阪大学・言語文化研究科日本語・日本文化専攻・助教 (14401)	教材作成における専門的知識の提供
研究協力者	平形（高橋） 裕紀子 (Hirakata Yukiko)	筑波大学・グローバルコミュニケーション教育センター・非常勤講師 (12102)	教材作成における専門的知識の提供
研究協力者	石川 早苗 (Ishikawa Sanae)	筑波大学・グローバルコミュニケーション教育センター・非常勤講師 (12102)	教材作成における専門的知識の提供
研究協力者	君村 千尋 (Kimimura Chihiro)	筑波大学・グローバルコミュニケーション教育センター・非常勤講師 (12102)	教材作成における専門的知識の提供
研究協力者	前川 孝子 (Maegawa Takako)	筑波大学・人文社会科学研究科国際日本研究専攻・大学院生 (12102)	作文調査における計画および実施の補助
研究協力者	呉 佩珣 (Wu Peihsun)	筑波大学・人文社会科学研究科国際日本研究専攻・大学院生 (12102)	作文調査における計画および実施の補助